

今回は日本語「ちょっと」の表現を考えてみましょう。場面は引き続き医療場面です。

① 診察後、次回の予約日を確認する場面

医師：Aさん、どうしますか？（カレンダーを見ながら）

患者：木曜日はどうでしょうか？

医師：う～ん、木曜日はちょっと・・・。

患者：じゃあ、金曜日にします。



② 診察室での会話（定期的に通診している患者と医師の会話）

医師：Aさん（医師が患者に言う）、どうですか？

患者：同じです。

医師：ちょっといいですか？

（触診をして）はい、大丈夫ですね。じゃ、いつもの出しておきますね。

（「医療通訳の実践 多文化共生センターきょうと」より）



- ① 患者は「（次の予約日は）木曜日はどうでしょう？」と質問をします。木曜日は「OK」なのか「だめ」なのかどちらかの答えを待ちます。ところが「ちょっと」と返されたために、「だめなのか？『ちょっと』（少し）」ということ、来てもかまわないのか？少しなら来てもよい？」と医師の言いたいことが掴めずに混乱しています。

この場合「ちょっと」の次に続く言葉、医師の言いたいことは、「木曜はダメ」です。

遠回しに断っています。

次の動画では、「木曜日は難しい」という医師の回答を受けて、「木曜日がダメならば、金曜日にします」と、患者の判断はスムーズに行われています。

- ② 2つ目の会話の「ちょっと（いいですか）」の一言に込められた意味は何でしょうか？

この場合は「聴診器を当てて診察します。衣服をたくし上げてください」です。

動画では、具体的な手話表現をしています。

実際の場面では、医師が聴診器を耳に当てて、準備をしながら患者に声かけをします。定期的な通診をしている患者は、その医師の動作を見て衣服をたくし上げるのかもしれませんが、だからと言って、「ちょっと」＝「少し」の表現で済ませるのではなく、具体的な表現をすることが、より良いコミュニケーションにつながりますね。

☆動画の最後に聴文化とろう文化の違いを解説しています。聴こえる人たちは、遠回しに言っても通じ合う、あえてはっきり言わない、その方が良い場合があるという文化です。しかしろう者にとっては、曖昧にしない、はっきりと伝える方が良いのです。また、より具体的に表現することも大切です。地域の学習会で、「あれ」「ちょっと」の場面設定を持ち寄り、ろう者に伝わる手話表現を検討してみませんか。そして、事例を事務所へ是非お知らせください。お待ちしております。